

暖かなひざしの中で迎えた今年のお正月も、あつという間に過ぎて暦は三月になつてしまいました。



是まりなき心

一心にとらわれず、心をつかうおめでたいお正月が来たあとは、受験生をおもちの御家庭では、なんとなく落ち着かない日々をお過ごしになられたことでしょうし、お勤めの方々も長期の休みが続くと、コロナ禍でリモートによる勤務がふえたとはいえ、気もゆるみ、規則正しい毎日に戻るのに随分時間がかかりがちです。

こんな具合に私達は、季節が変わるといふ事象に影響され、いたずらに怒ったり、気がゆるんだり、イライラしたりします。このような私達の心の動きは、どんなに文明が発達し生活が進化しても、地球上に人間が生まれてからずっと変わりません。

百年後に日本民族は消滅するという数字に驚いたものでしたが、今、当時の数字をはるかに上回る異常なスピードで出生率が低下し、人口減少が止まらない厳しい現実が続いているそうです。

二、三百年後には、日本民族はどこにも見当たらなかつたということにもなりかねないとのことで、政府や国会、地方自治体は、今、出生率を上げること懸命になつています。自治体によっては、十八才以下の子供には、一律毎月五千円の支給援助をする所もあつたり、第二子からの保育料を免除したりと、有効な手段を模索し始めたようです。

勿論、それはとても大事なことですが、あらゆるいのちに真剣に思いをはせてみることも必要なことなのではないでしょうか。私達が幼い時、あれだけ身近にいたメダカ、タガメ、ミズスマシは一体どこに行つ

物質にとらわれ、相対する人間の動きにとらわれ、自分の周りの空気の動きにとらわれと、私達の心はなんと定まらず、フラフラと動くものなのでしょう。

自分の心が動いている時、ほんの一時・静かに目をとじ、自分の心を観察し、自分のありようをみつめる時をもつことも、大切なことだと思います。

自分の心につかわれることなく、自分の心をつかいたいものです。



人口減少時代

日本の人口が減り始めたという言葉を聞いて、久しかなりません。

一時期、日本の人口が毎年十万人減少するとすれば、十年間で百万人減、百年間で一千万人減、千三

てしまったのでしよう。

五十年位前でしようか。スピッツという白い毛のかわいい犬が、あちらの家でもこちらの家でも飼われていました。しかし今、どこにも見当たりません。人間の好みが変われば、ペットが地上から消されるのはあつという間なのだなあと驚かされます。

このような例を挙げなくとも、いのちが軽々しく扱われている事件は、毎日、毎日あとを絶たずに起こっているのが現状です。物が乏しくなると、その価値が上がるように、出生率が低下している今、いのちの大切さを思う、良い機会が与えられたのではないでしようか。

涅槃会について

わが国では、二月十五日をお釈迦さまのご入滅の日としており、その法要を「ねは

ん会」といつております。

当寺でも、その時のお釈迦様の姿、それを囲むお弟子様達をはじめ、仏教守護の神々や鳥獣に至る五十二種類のものが集まって、嘆き悲しんでいる有様を描いた「涅槃図」を二月の声を聞くと、本堂に掲げます。

お釈迦様は、「いのちあるものは、必ず死ぬ。会ったものは必ず別れる」

「全ては大いなる命の働きの中の一つの現象である。ただ悲しまず、事物をありのままにみなくてはいけない」と、この世の無常を、その折の説法の中で説かれたと伝えられていますが、「涅槃」という語は、梵語でニルバーナ、「吹き消す」という意味があり、現在では「ねはん」即死ぬという意味で使われがちですが、本来は、「ぼん悩



の炎を吹き消して、さとり境地に入ったこと」「真実に目ざめること」を指す言葉です。

私達も、この「涅槃図」から真実に目ざめさせていただきたいものです。

一口伝導板

○教えの縦糸 心に織れば
結ぶご縁は 横の糸

○さみしい時には 目をつむろう
まぶたの裏には 広い世界がある

○悲しい時には 手を合わそう
胸の中には 光りがある

○気分ひとつで 大違い
もう半分と まだ半分
